

令和5年度第1回北九州市総合教育会議 会議録

1 日時

令和5年11月13日（金） 15:30～16:50

2 場所

小倉リーセントホテル 2階 玄海の間 （小倉北区大門一丁目1番17号）

3 出席者

市長部局：武内市長、稲原副市長

教育委員会：田島教育長、大坪委員、竹本委員、郷田委員、香月委員、中島委員

司 会：小杉教育委員会総務部長

4 議事録

司会

ただいまより「令和5年度第1回北九州市総合教育会議」を開会します。私は、教育委員会総務部長の小杉と申します。本日の会議の進行を務めさせていただきます。

また、本日の会議の様子はインターネットにてライブ配信を行っています。

ライブ配信でお聞きの皆様は、回線の状況等により、聞きづらい場面がある可能性もあります。予めご了承ください。

それでは、最初に、武内市長からごあいさつをお願いします。

武内市長

今日はお忙しい中、北九州市総合教育会議にご出席いただきまして、心からお礼申し上げます。また、お集まりいただいた皆様、ライブで見ていただいている皆様、ありがとうございます。教育長、教育委員の皆様には、日頃から、北九州市の未来を担う子どもたちの教育についてご尽力いただきまして、あらためてお礼申し上げます。

北九州市では、2040年を目指した新しいビジョンづくり、都市像をどう描いていくか、という作業をしている最中ですが、その主役となるのはお子さんたちです。

グローバル化が進み、社会課題が複雑化・多様化する中で、お子さんたちが力強くしなやかに生き、ウェルビーイングを実現していくためには、持っている可能性を最大限発揮できる、そういう環境を大人たちが作っていかねばいけない。そして、変化の波に耐えられる力をつけられる、そういう道筋を作っていかねばならない。社会全体で子どもたちの下支えをして、子どもたちをいざなっていかなければならないと考えています。

北九州市では、今日の会議を契機として、次期教育大綱の策定に着手します。「こどもまんなか社会」を実現するためのこれからの教育のあり方について、総合教育会議の場を通じて、教育委員会と議論を重ねてベクトルを合わせ、また、新しい北九州市のビジョンとも歩調を合わせながら次期教育大綱を策定したいと考えています。本日はご忌憚のないご意見をいただきたいと考えていますので、どうぞよろしくご意見申し上げます。

司会
<p>武内市長、ありがとうございました。 続きまして田島教育長からご挨拶をお願いします。</p>
田島教育長
<p>教育委員会を代表して、一言ご挨拶申し上げます。武内市長におかれましては、平素から、北九州市の教育行政の充実にご理解・ご支援をいただき、あらためてお礼申し上げます。本日午前中に、「こどもまんなか city 宣言」を、武内市長自ら、小学校で宣言されたとのことで、子どもの成長を社会全体で応援するという市長の強い思いを伺ったところです。</p> <p>コロナを契機に、学校における教育の役割は広がり続けています。子どもが抱える問題が複雑化・多様化する中で、ウェルビーイングは子どもだけではなく、教職員にとっても、働き甲斐のある環境を整えないといけないと考えているところです。</p> <p>市長のおっしゃった、次期教育大綱がその道標になるものと考えています。本日の会議を通して、今後目指すべき教育の方向性を市長と共有をさせていただきたいと思います。よろしくようお願い申し上げます。</p>
司会
<p>田島教育長、ありがとうございました。それでは、議事に入ります。 協議「次期北九州市教育大綱の策定」について、教育委員会企画調整課長からご説明します。</p>
【協議】次期北九州市教育大綱の策定について
栗原企画調整課長
<p>それでは、資料1「次期教育大綱の考え方」からご説明します。</p> <p>まず、この資料の全体的な構成として、バックキャストとフォアキャストの双方の観点で資料を作成しています。教育を取り巻く現状や課題、新たな時代の要請を踏まえた上で、今の小中学生たちが社会を担うことになる2040年頃には、このような大人になってほしいという、目指すべき姿を掲げる。そして、そういう人材を育てるために、今後5年間で北九州市が取り組むべき教育の方向性を示すのが次期教育大綱で、そのキーワードとして考えられることを資料中央に書いています。</p> <p>なお、2040年というのは、国が6月に策定した教育振興基本計画や、北九州市が策定中の新ビジョンでも目標年次としています。</p> <p>まず現状の部分から説明しますので、資料の上の方をご覧ください。巷間よく言われていますように、少子高齢化やグローバル化、デジタル化の進展といった社会の大きな変化や課題がある中で、社会を牽引する駆動力の中核として、教育の果たす役割はますます重要なものとなってきています。</p> <p>一方で、教育に係る各主体が抱える課題も、また大きくなっています。</p> <p>子どもにつきましては、不登校や特別支援の増加、マイノリティへの対応といった複雑化・多様化する課題があり、教職員ではなり手不足、社会環境では施設の老朽化、家庭・地域でも環境の変化やつながりの希薄化といった、様々な課題があるところです。</p> <p>続きまして資料の左側をご覧ください。「教育における不易と流行」とありますように、教育には、教育基本法で定められた普遍的な使命があると同時に、新たな時代の要請への対応も同時</p>

に考える必要があります。特に最近では、こどもの権利条約に則って今年4月に制定されたこども基本法で示された、「こどもまんなか」という考え方がクローズアップされているところです。

その下、「こども・市民の声」をご覧ください。後ほど改めてご説明しますが、市内の小中学校の子どもと保護者にアンケートを行いました。「どんな大人になりたいか」、「そのために何が必要と思うか」ということを聞いており、大綱を作る際には、そこで出て来た声を踏まえる必要があります。

その下には、有識者の意見を掲載しています。市の新ビジョン検討会議の委員や教育委員の方々から、「失敗をおそれない姿勢」、「哲学が必要」、「こどもが主人公」、「レジリエンスが重要」、子どもだけでなく教職員に関する意見も出ているところです。

資料中央をご覧ください。次期教育大綱は、令和6年度から10年度までの5年間における、教育の基本方針で、冒頭に申し上げましたように、これから大綱を作る上で、キーワードとして考えられるものをここに記載しています。

「こどもまんなか」、「ひとりひとりが主人公」といった大きなテーマがあり、その中身として少し解像度を上げますと、「こどものウェルビーイング確保」、「未来を創る能力の獲得」、「安全安心な居場所づくり」、「こどもを支える教職員のウェルビーイング確保」といったことが挙げられます。

そして、それを実現するために、

- ・こども1人ひとりの違いを理解し、こどもの意見を尊重すること
- ・誰ひとり取り残さない学びと、先端的な学びを進めること
- ・失敗を恐れず挑戦する力を養い、こどもたちそれぞれが本来持っている可能性を最大限引き出せるようにすること
- ・教職員については、働きやすく、スキルアップもできる、働きがいのある職場づくりによって、そのポテンシャルを発揮しながら、地域や企業とも連携しながら取り組んでいくこと

こうしたことが必要ではないかと考えているところです。

最後に資料の右ですが、こうした取組によって、今の小中学生が社会を担う2040年には、これからますます不透明さが増す時代となっても、しなやかに強く、主体的に生きていける大人になることで、個人個人の、ひいては社会全体のウェルビーイングを実現するという姿が望ましいのではないかと考えているところです。

本日の会議におきましては、資料の中央と右の部分、つまり大綱のキーワードや2040年の姿という点を主に協議していただきまして、その内容を踏まえて、次回の会議でご提示する予定としています、大綱の文案を検討したいと考えています。

なお、次期教育大綱は、今年度中に策定する予定で、この次期大綱を踏まえて、教育委員会で、次期教育プランを今後策定することになります。

続きまして、資料2をご覧ください。先ほど触れた、全校アンケートの結果です。

アンケートは、今年の夏休み明けに約3週間かけて、全ての小中学校と特別支援学校で、児童生徒は4年生以上、保護者は1年生以上を対象に行いました。

質問は、「どんな大人になりたいか」、保護者については、「子どもにどんな大人になってほしいか」、という問いと、「そのために何が大切だと思いますか」、という2問で、選択肢の中から3つまで選べることにしました。

回答率は、児童生徒は69.9%、保護者は13.5%です。

児童生徒と保護者それぞれについて、上位5位の回答を掲載しています。トップはいずれも「思いやりのある大人」になりたい、あるいはなっていてほしい、という回答で共通しています。その他には、「挑戦する」、「自分の考えを持つ」、「生きがいを持つ」大人に、という回答が、順位の上下はありますが、両方で共通しているところです。

「大切なことは何か」という問2については、「夢や目標を持つ」、「あいさつや感謝」、「周りの人を大切にする」といった回答が共通しています。なお、子どもは「勉強」が3位に入っていますが、保護者は6位なので、この中には入っておりません。

次の資料が、選択肢全体の回答結果で、左のページが子ども、右のページが保護者なので、左右を見比べると、親子が考えていることの共通点や違いが分かりやすく見えるのではないかと思います。

次の資料は、問1の選択肢ごとに、問2で何を選んだかという傾向が分かるように、問1と問2をクロス集計した結果をマトリックスで表しています。表の見方ですが、縦軸が問1の選択肢、横軸が問2の選択肢となっています。縦軸を見ていただくと、一番上の黒い太枠で囲んだ部分が、問1の選択肢によらない問2の回答結果です。

その下に、問1の選択肢を、回答が多かった順に並べて、選択肢ごとに、問2の回答結果を示しています。太枠内の数値と選択肢ごとの数値を見比べることで、選択肢ごとに、どこに特異点が出ているかを見ることができるとと思います。

例えばですが、1位の「思いやりのある大人」を例に説明します。太枠内の全体平均では、「あいさつや感謝を忘れない」を選んだ子が46.3%に対して、問1で「思いやりある大人」を選んだ子については、59.5%が「あいさつ・感謝を忘れない」を選んでおり、全体平均と比べて約13ポイントも高くなっているため、問1で「思いやりある大人」を選んだ子は、そういう大人になるために、特にあいさつが大切だと考えていることが分かります。ということで、水色で着色しています。

なお、水色は全体平均と比べて10ポイント以上、緑は5ポイント以上高くなっている部分、逆にピンクは10ポイント以上、黄色は5ポイント以上低くなっている部分を表示しています。

その他には、例えば7位の「世界で活躍する大人」を見ますと、そのために大切なこととして「夢や目標を持つ」と「体力をつける」が水色で高めにしているのに対して、「あいさつと感謝」と「周りの人を大切にする」が黄色で低めに出ている、という傾向が分かります。

次の資料が保護者版です。子どもと同じく、縦軸で7位の「世界で活躍する大人」を見ますと、「あいさつと感謝」と「周りの人を大切にする」はピンク色で、子どもと同じように低めに出ていますけれども、高めにしているのは水色と緑の部分、つまり「勉強」、「体験」、「夢と目標」で、「体力が大切」と答えた子どもとの違いが表れているところです。

続きまして、資料3です。

こちらは、北九州市で策定中の新ビジョンについて、先月の常任委員会や有識者の検討会議

で示された資料です。

「稼げるまちの実現」、「ハイクオリティな都市づくり」、「市民の安全安心な暮らしの確保」という3つの視点ごとに、有識者などからいただいた主な意見を掲載しており、特に教育に関わる箇所を赤い線や枠で強調しているところです。

次の資料、参考1をご覧ください。

こちらは、市の新ビジョンの策定にあたって、様々な場を設けて多様な視点から意見をいただいております。その中から、教育に関係する意見を抜粋して掲載しています。網掛けしている部分は、冒頭に説明した資料1に掲載している意見です。

続きまして、参考2です。

こちらは国の資料です。6月に国が策定した、「教育振興基本計画」の全体像です。現状・課題を踏まえて、新しい計画のコンセプトとして、2040年、持続可能な社会、ウェルビーイングといったワードが示され、今後の基本方針として、グローバル化への対応、全ての人の可能性を引き出すDX推進等が掲げられています。

資料のご説明は以上です。これまで説明した資料を参考にしながら、北九州市の教育大綱を検討していく必要があると考えていますので、よろしくをお願いします。

司会

ありがとうございました。ここから意見交換に移りますが、初めに武内市長より、今の説明に補足する内容や、市長の思いなどございましたらお願いします。

武内市長

今まで教育委員の皆様とお話をする機会がありましたけども、教育論を私なりに見ていると、人材論と尊厳論が相克しているところがある。すなわち、社会にとって、まちにとって、日本という国にとってどういう人材が求められるかという、人材論の切り口と、あえて尊厳論というと、子ども一人一人が、かけがえのない尊い存在として、どういうふうにして人として幸せな人生、一生を送ってもらうのか。そのためにはどうしたらいいのか。この二つが常に相克して、国の資料を見ていると、特に人材論が割と強く出ているような気がしますが、それは、今の日本が置かれている色々な状況の中で、日本という、国の在り様を考える、というところからきている部分もあるかもしれません。

ただ私は、もちろん両者のバランスをしっかりととらなければいけなくて、人材論に深く引っぱられすぎずに、地域で人材を生み出していく、まちで人を作っていく、というある種の手触り感がある教育現場、それを実際に実践する場をもっているのもので、その両者を見ながら、尊厳論みたいなのところにもしっかりとフォーカスをしないといけないという感想をもちました。

もう一つ教育に関して思ったのが、大人が手を差し伸べるというか、大人が提示する子どもの育ち方。まさに「教育」みたいな、「育てる」という世界感と、子どもが自分で「育つ」とか、「育ち」みたいな、「教育」というか「学育」とかいった言い方することもあります。この二つもいつも相克しているという感じがありますが、そこもこれからの時代には、より後者の方、自ら育つ、子どもではなくて、ある種1人の社会の構成員としての立場から見ていくという観点を自覚的に持つ必要があるのではないかという印象をもちました。

面白いなと思ったのは、アンケートの最後の保護者の欄を見ると、印象的だったのが、保護

者の方々がどんな大人になって欲しいかというところに、大人から子どもへのリクエストが強く出るなど。「挨拶、感謝の言葉を忘れない」とか「人に言われる前に自分で行動する」、「家族や友人を大切に」といった、大人から見た、子どもへのリクエストが表れていると感じました。合わせて考えると、「人の役に立つ大人」が子どもの中では2番目に出てくる。これはもう素晴らしいことだと思います。大人は6位。44%と15%で3倍も違う。これは大人がよく考えないといけないのではないかという思いを持ちました。あと、「運動して体力をつける」。心や頭を作っていく土台としての体とか身体性に対して、子どもが18.4%という問題意識を持っているのに、大人は6.2%と、ここも非常にプラクティカルな考え方をしているのかなという印象を持ちました。

第一印象はそういうことを思ったということを経験の感想としてお話ししたいと思います。

司会

ありがとうございました。では、ご意見、ご感想などございましたら、挙手の上、ご発言をお願いします。

田島教育長

1点補足ですけど、市長がご覧になったアンケートで、保護者の「世界で活躍してほしい」というのと、子ども達が、「世界で活躍したい」と思うロールモデルがきっと違うのだろうなと思っています。やはり子どもはある意味シンプルなので、イチローとか、大谷とか世界で活躍するといったら多分そういう人たちをイメージして、そのためには、部活とかスポーツを頑張ろうという感じがしました。大人の方が妙にいろいろと我が子に対して、リクエストなのか、いろいろと考えてこの数字なのかなと思いました。

大坪委員

先ほどのお話もそうですし、今までも何度かお話を聞く中で、市長はやはり色々なことに挑戦し続けるような子どもに育てて欲しいということをお話いただいて、そのためには、どちらかという、今の大人とか教育に携わっている人たちが、こういう人になって欲しいという、あまり枠を先に決めて欲しくないとおっしゃっている。実際に子ども達は、これからおそらく私たちが知らないような職種の仕事についていく子どもたちも、2040年には実際に出てきていると思うんです。そういうことに積極的に挑戦していくという形でいくと、私たちがまず現状の教育のあり方を見直していく一つの視点として、枠にはめない、選択肢を限らない、できるだけ多様な子どもたちを認める形で励ましていく。もちろん社会的、或いは学級の中や学校の中で、少し人の迷惑になるようなことについては注意をしなければいけません、子どもたちはアンケートで見えるように、人の迷惑にはなりたくない、これだけたくさん答えてくれているので、少し、私たち大人が勇気を持って子どもたちの多様性を、まずはこういうことに挑戦したいっていうことを、励ますということが大事なのかなということを経験の話やデータから感じ取らせていただきました。

竹本委員

私もこのアンケートと、市長にお話いただいたことに関して、感じたことを発言させていただきます。

私も「人の役に立つ大人になりたい」、「思いやりのある大人になりたい」と、そのために「夢

や目標をもって」、「挨拶や感謝の言葉を忘れない」ことが大切であると、子ども達の多くが考えてくれていることを、とても嬉しく感じました。

子どもたちのこういった回答に関して、私が思ったのは、4年間のコロナで、いろいろ自分達だとか、大人の思い通りにならなかったり、それこそ自身のウェルビーイングが脅かされるような、色々な状況を体験して、そういった中でお互いに助け合ったり支え合ったりっていう、そういうことの大切さであるとか、相手を見て直接挨拶をしたり、コミュニケーションを取ったり、そういった事の楽しさというのを、子ども達はしっかりわかってくれたのかなというふうに感じています。

それがアンケート結果に表れていると思いますので、そういった気持ちを大切に、引き出して、育てていってあげるような教育をめざしたい、めざしていただきたいと感じました。その時に考えたのが、そういう子どもたちの思いを実現するには、最初の市長のごあいさつにありましたように、多様性を尊重する環境なのかなと思いました。こういった機会ですので、子どもたちの力を発揮できる環境についてもお話したいと感じました。

中島委員

私も市長の「自ら育つ」とか、大坪委員の「枠にはめない」という点にすごく共感するところで、いい意味で、子どもたちは私たちの予想しないような力を発揮できる大人になってもらいたいなという点に共感しているところです。

そのためには、子どもたちは多様な価値観と多様な生き方をもって生きるというのがとても大事だと思っていますが、その点について確認したいことがあります。この2040年の姿・ウェルビーイングの実現で、失敗を恐れず挑戦し続け、可能性を發揮して、不確実性の高い時代でも主体性をもって生き抜くというのは、そのような力を發揮するという理解をしてよろしいでしょうか。ともすると、そのようなパーソナリティをもってほしいという表現にも取れますが、子どもが多様であることを求めるのに、そのような画一的なパーソナリティを持つてほしいというのは矛盾することなので、このパーソナリティというのはどのような価値観を持ってどのような生き方をしているか、このような力が発揮できるようにというふうに考えてよろしいのか、その点について今後話をする上で、確認させていただければと思います。

栗原企画調整課長

ここに書いているのは、2040年に子どもたちが大人になった時に、こういう力を持っていると、これからの社会、我々が予想できない社会においても、自分の主体性を持って、生き甲斐をもって生きていける。そういった大人になってウェルビーイングの実現に向けてということで、こうした力を身につけられるように、我々として今から育てていくということが大切ではないかという。そういう意味でここに掲げています。

武内市長

お子さんにはやんちゃな子も、おっとりした子もいるし、気が早い子のんびりした子もいる。それぞれのキャラクターや持ち味の中で、自分らしく自分なりの人生の中で、挑戦というか、自分の中で可能性を發揮できるような道筋を生み出して、そこに自分なりにトライできる、そういう力を作っていくべきだという趣旨だと理解しました。ただ言葉として「挑戦」、「可能性」と書くと、全員がものすごいアグレッシブに野心をもって生きているようですが、そ

う枠をもまた新しい枠になります。そういうことではなくて、それぞれが絶対的な価値をちゃんと大切に、という理解でいきたいと私も思います。

香月委員

資料の書き方が、ウェルビーイングの実現を目指すのが目標で、失敗を恐れずに挑戦するという方法論みたいところを、あまりにも強調しているような図になっていると考えます。多様性を認めるという意味において、市長が言われたように枠にはめるような印象を強く思います。ここら辺も上手に変えていただいて、ウェルビーイングの実現というのがわかりやすくなるような図にしていただけたらと思います。

郷田委員

昭和の時代の、明るく元気で友達の多い子がいい子だ、そうなるべきだ、みたいな雰囲気があったと思うのですが、そういった型にはめずに、多様性を認める教育というのがこれから大事だと思っていて、そのためには大人が今まで持っている固定観念を変えなくてはいけないと思っています。

私も、社内で年下の社員の指導をしたり、子どもを自分で育てたりする中で、やはり自分は固定観念があるなと思います。努力すべきとか、効率的にやるべきとか、そういった固定観念を、先生方や保護者が疑って、考え直して、こういったところもいろいろ考えていけないと拝見していて、非常に悩ましい、一言で答えがでるものではないと思っています。多分現場で色々はお子さんを指導している先生方がすごく考えているのと思いますので、そういったところを深めるような時間をぜひ先生方に持っていただけるような職場環境だということと思っています。大綱の中にありますけれども、教職員がゆとりをもって安心できるような場を作るといったことに是非注力していけるといいと考えています。

武内市長

多様性って何だろうと考えた時に、それぞれの色々なキャラクターや特質をリスペクトしたり、大切にしようという事ですけども、その奥には、それぞれのいろんなタイプのオリジナルの幸福感、幸福の定義をもつということではないかと、私なりに定義をしてみたいと思います。

先ほどのアンケートの中でも、挑戦するのが大事で、そういう大人になりたいという子もいれば、穏やかな毎日を過ごす大人、これはこれで一つの生き方です。きちんと安定した人生、これもひとつの価値観だし、自分の幸せの形だし、それがそれぞれ尊重されて自分たちが誰かにそれを定義されるのではなく、自分でこれだと決めていくのが非常に大事だと思います。なので、大人が勝手に定義をしない、べき論みたいなのを言わない、という形がこれからの子どもへの在り方として大事な点です。

他方で、今、郷田さんがおっしゃった、結局教育は大人がハッピーな姿を見せれば子どももハッピーになるだろう、というところがあります。先生が楽しそうに毎日働いている、これが何より一番近いところだと思います。もちろん親もそうです。あともしかしたらシニアの方とかが、年を重ねてもこういうふうにしなやかに暮らせる、ハッピーに暮らせるという姿を見せること、大人がそういう姿を見せることが子どもにとってもいいと思います。年上の方からの影響も非常に大事だと思います。

他方で私が少し思っていたのが、一人一人の個性や多様性を尊重するというのが一番出発点と言った上で、レジリエンスみたいなものをどうここに含めていくか。時代がものすごく変わっているし、途中で色々なことがありますよね。SNSの問題もあるし。一回職業に就いても、途中でスキルが陳腐化したり、就いた職業の産業構造が変わってしまうということもあるし、予測不能、理不尽なことが起きやすい環境になっている。或いは非常に翻弄されやすいような、色々な人間関係・職場関係が出てくる中で、今まで以上に失敗力というか、世の中で失敗と言われる、うまくいかないことがあったとしても、どうやってもう1回立ち上がって挑戦をしていくのか。或いは経験値を小さいところに積んでおくのかとか、苦悩する中からどうやって、次のステップを考えていくのか。苦悩する力みたいなものは、時代の流れの中でそういうことに対する対応力も、しっかり考えておいて、それぞれがいいんだよ、それぞれでいいんだよということに加えて、時代性というのをに入れていかないといけないかなという思いはあります。先ほど事務局が出してくれた不確実性の高い時代でも主体性をもって生き抜くというのはそういう思いを込めていると読みました。そこはそこで、しっかりレジリエントな経験とか、疑似体験みたいなものが一つ大事な要素かな。ある種危険に近いような事をチャレンジして、或いは失敗してもいいからチャレンジやトレーニングをしておくということも、今の時代性の中では必要で、おっとりした子、のんびりした子も大事だけど、その部分を接合するのも大事なというふうに思いました。

中島委員

私も、レジリエンスというのはとても大切な力だと思います。

私たちは、新型コロナウイルスの流行っている時期に、困難と共に生きるということを学んだわけですから、子どもたちが困難は排除するとか困難はあってはならないというのではなくて、自分の人生の中の苦悩とどのように共に生きるのか、その中でどのように自分なりの幸福を見つけていくのかというのがとても大事だと思います。そういった中で、やはり学校が安心して失敗できる場であるとか、その困難とどのようにしたら共に生きられるのかというのを体験できる場であるというのはとても大事だと思います。

大坪委員

次期教育大綱のとても大切なキーワードの一つが、やはりレジリエンスだと思っています。ただし、一人で乗り越えていく力と、みんなで乗り越えていく力、或いは、友達を支える力、友達に支えられる力も含めて考えていきたいと思っています。

レジリエンスに直結するような辛い経験から考え方を考えることによって乗り越えていくという細かい心理的なプログラムみたいなことは、実はもうすでに用意してあって、個に対してはそういう取組を進めていきたいと思いますが、何よりも、子どもたちのアンケートを見たら、「思いやりのある大人になりたい」、「人の役にたつ大人になりたい」と言っている。この二つの項目はおそらく、友達を支えたい、家族を支えたい、或いは、逆に言うと、家族や友達に支えてもらいたいという、非常に高い対人志向性を示している項目だと受け止めています。ここはやはり、実際に役に立つというのはどんなことができるだろうという形の一つに、やはり友達が傷ついた時に、励ましてとか、支えてとか、そういうことについて、今でも学校教育の中に入っていますけれども、もう1回見直す取り組みは、是非挑戦してみたいと思います。

武内市長

大坪委員がおっしゃったこと、本当に大事だと思います。コロナをみんなで乗り越えたということもありますし、そういった中で、個が個でレジリエントになるのではなくて、個が足りないところを補完しあって、チームとして、仲間としてどう乗り越えていくのか、スキルとっていいかわかりませんが、これを自覚的に育むというのは大事だと改めて思います。とりわけ今、ネットとかSNSが流行っている中で、ある種、フィルターバブル的な、自分で好きな情報、自分の好きな人とだけ繋がるということであったり、リアルな関係性をもたずにネットの中だけで繋がるという、その善し悪しは脇に置いて、やはり個人がフラグメントするというか、蛸壺化する中で、自覚的にチームを作る力。助けて、助けられるということをやうまくやる力を育むような要素を、今の時代、自覚的に続けてもいいのかなと思いました。

郷田委員

子どもたちのアンケートを見て思ったのは、大人に言われてこういう価値観が育ってきているところも多分にあるだろうと思っていて、情報を得る方法が一定になってしまうと、なかなか多様なところに目が向かないというのがあります。そういった中で、義務教育、学校教育の果たす役割はすごく大きいと思っていて、自分の生まれた場所の近くで、家庭の中では得られない情報に触れられるとか、出会わない人に出会えるとか、そういった機会もたくさん提供できるような機能をぜひ持って欲しいと思いました。

例えば、教育長がおっしゃった、世界で活躍する大人のイメージが違うのではないかというのも、情報のあるなしで想像する未来も変わってくると思いますので、そのあたり、子どもたちに、こういった機会や情報を提供できる場にするかというのは、是非考えていきたいと思いました。

中島委員

レジリエントを考える上でも、今後の学校がどのような役割を果たすかという意味でも、子ども達が自分の生身の体を使って、どのように学びを深めていくかということがとても大事だと思います。レジリエンスの中でも自分の体とか自分の感覚は、とても大事な要素として扱われていますし、学びの方法が多様化されて、ICTを使ったり、膨大な知識を扱えるようになっているので、何が学校の特色か、学校が強みとして生かせるかって言ったら、生身で活動できるところが大きいと思います。学校はなぜ行かないといけない所なのか、そこで何をするのかというのと、子どもに将来身につけさせたいことを結びつけると、身体性であったり、生の感覚を刺激できる大きなポイントですので、そのことについても入れていただけたらいいと思いました。

大坪委員

郷田委員が、子どもたちを方向づける一つの有力な手がかりが、先生たちが望むような行為や行動、発言があったときに、先生たちが笑顔になったり褒めたりすることで、子どもたちがそういうことをよくするようになるというようなお話がありました。

まさに広い意味での教育評価なんです。そういう意味でいうと、何かに挑戦したり、頑張ったりした時には、褒めていこうとしているわけですから、これからは学校の先生たちも子どもたちが何かやったときの評価をしていく時の言葉として、「〇〇君は、〇〇について何時間頑張

ったよね」と。価値づける必要はないと思います。事実をそのまま言ってあげればいいと思います。できなかったことがここまでできるようになったねというような形で子どもたちにフィードバックをし続けていくことが出来れば、おそらく子どもたちは、学校の先生って何かに挑戦すると何かフィードバック返してくれる、褒めてくれるとか、認めてくれるという感覚を持ってくれると、子どもたちは、そういうふうを重ねていく。学校の先生だけでなく、学級通信・学校通信を使って、校長先生はですね、それぞれの学年段階で有効な言葉かけが違うので、そういう情報を保護者の方に伝えていただければ、子どもたちが、家の中で、保護者の方たちから話しかけてもらえる言葉が変わると子どもたちも変わる。ちょっと思い切ったこと言わせてもらえば、通信簿の中に、そういうことが書き込んであったり、小テストやテストの時のフィードバックの時にそういう言葉が書き込んであれば、おそらくもっと、力強く、子どもたちの背中を押していく、そういう働きかけになっていくだろうなと思いつつ、先ほどの議論を聞いておりました。

武内市長

やはりコミュニケーションが、非常に、言葉かけの話、色々な形で、インタラクションっていうんですかね。相互にやりとりする回転数とか頻度は大事にしたいと思います。さっきのネットの話ではないですが、生身の人間同士の繋がりの中にいるという安心感や、そこから生まれる自己承認感というか肯定感、すごく大事な要素だと思います。私たちも大きな組織を率いていると、言葉かけとか、コンタクトとかがものすごく大事で、やはり誰かが見てくれている、或いは誰かがちょっと声かけてくれる、先生がちょっと気を配ってくれるというところはすごく大事で、先生と子どもの中で、そういう場を作る。やはりコミュニケーションで、これがもしかしたら地域のシニアの方とのコミュニケーションとか、学校外の方とのコミュニケーションとか、そういうのもあるとさらに立体的になっていくと思いますが、コミュニケーションの回転数を上げていくということが大事な一つの切り口ではないかと思いつつ。

田島教育長

事務局の代表でもありますので、教育委員の皆さんのご意見と市長のご意見が同じ方向を向いているなとつくづく感じたのが、昭和の意識を引きずっているのが、事務局の私たちそのものかなと。今までの教育プランというのはどちらかというと、「こういう子どもを育てたい」、「こういう子どもになってほしい」、「子どもたちにこういうものを与えます」という、ストーリーが多かったのですが、本当にパラダイムシフトしないといけないのは、事務局というか私たちそのものであって、子どもは本当に自分たち自身がそういう力を持っている、それを信じて、レジリエンスにしても、型にはめない、型を崩す努力を事務局もしないといけないと、つくづく感じたところです。

武内市長

実はこの「こどもまんなか」という言葉も、きちっと定義をして咀嚼しておかないといけないなと。今朝私も「こどもまんなか city 宣言」をしてきましたけど、「こどもまんなか」は、子ども家庭庁も明確な定義づけはできてないと思います。「こどもまんなか」というコンセプトは非常に大事だし、大切にしている。他方で、教育長がおっしゃったように「こどもまんなか」というと、ともすると子どもに大人がサブする、子どもに私たちが真ん中になるように何か

整えてあげる、真ん中にしてこれを提供するという、すなわち受け身、或いは客体としての子どもという感じになってしまうと、それは全く真逆の意味になってしまう。「こどもまんなか」というのは、子どもがそれぞれの存在として、自分でオーガニックに生きながら、自分の力で自分で律する。逆説的ですが、逆に大人のように扱う、社会人として扱うのが、「こどもまんなか」の本質かもしれません。このあたりは「こどもまんなか」という言葉で、子どもがお客様ではないので、そこら辺の意識は、この言葉を使う中で、私たちがしっかり咀嚼しておかないといけないというのを改めて思います。

香月委員

ひとりひとりが主人公というのは、そんなに容易いことではないので、これをひとりひとりが主人公になれるような感覚と、自ら育って自らが主人公になれるような子どもに育っていくのが理想なんですけれども、それがまた型にはめてしまう。かなり堂々巡りのなところもあると感じています。

健全という言葉がいいのかわかりませんが、子どもが社会に適応して生きていかないと、普通の人間は生きていけませんので、社会の中で生きていける力を身につけさせるというのが、陰の目標ではないかと私は思っています。

もうひとつ、教職員のポテンシャルと教職員のウェルビーイングの確保と言われてはいますが、ここもなかなか確保できていない部分が多分にあります。ここもちゃんと考えないと、きつい職場には人は寄り付きませんので、そうすると人材の質も下がる。負のスパイラルになる可能性もあるので、やはり教職員のメンタル、ウェルビーイングというのはとても大事だと思います。教職員のウェルビーイングが、教えられる子どもさんのウェルビーイングにかなり影響があると思います。ですので、教職員のウェルビーイングを確保すると大綱にもちゃんと明記されていますので、これがプランニングされて確保されていくといいと思います。

武内市長

主人公という言葉も、主人公の定義にもよります。みんなが、本当の意味で主人公だというほど、自分を中心に世界が回ることはないわけで、あまり主人公主人公と言われると、主人公になれなかったときにがっかりさせちゃいけないですね。そのところは本当に言葉の使い方、あるいは表現の仕方にも関わる事ですから、大人のテーゼとして、自分が主人公であると言いついでいいものかどうか、私も躊躇を覚えるところです。自分の人生を自分が生きるという、それはスキルなのかマインドなのか、両方あると思っただけで、私たちはいろいろな内容、仕組みとか、機会とか、いろいろな要素があるので、スキルの要素も非常に、経験やこういう事を教えるというスキルのアプローチもある。多分にマインドセットによっても全然違ってくると思うので、ものの見方とか、ものの捉え方とか、ネガティブにとらえすぎてしまったりとか、そういうこともスキルとそのマインドの両面で考えていかなければ。

そしてやはり教職員の皆さんのウェルビーイングこそ、教育を語る上では一番根本の一つ大きな柱なので、今日はどちらかという、総論的な話ですが、これはこれで一大テーマとして、教職員の方々が幸せ、教職員の方々がウェルビーイングをまさに体現していなければ、それを間近で見る子どもたちがウェルビーイングの体感もできない。まさにそこは一大テーマで、どうやって教職員の皆さんを幸せにするかという議論はしないといけない。

竹本委員

子どもたち自身が、自ら自覚的に育む、そういった力を伸ばしていくのを守り支えるといった教育というのが求められている、そういうことは大変理解できます。ただ、今回の新しい教育大綱をもとに、これから具体的な教育プランに落とし込んで、それを教育現場でどうやっていくかということだと思うのですが、やはりその根底にある、一番確保しないといけないのは、ここにも明記していただいている、安全安心な居場所というところがやっぱり何より大切なことではないかと考えます。

まずは家庭、学校というのが、皆様のお話にもありました通り、子どもたちが、自分の可能性を信じて色々なことにチャレンジすることを楽しめる、そういった環境は、やはり、安全安心が何より大事だと思います。そういう環境を作るには、やはり家庭、地域社会全体で、取り組んでいかななくてはいけないのではないかと考えていますが、社会全体で取り組む課題という意味での安全安心な居場所について、市長のご意見をもう少し詳しく伺いたいと思います。

武内市長

何か挑戦とかレジリエンスといっても、土台となる部分に不安があったり、まさに安全安心という部分が確保されないと、居場所という言葉に表れるように、自分がその中の構成員としてしっかりと認められていること、あるいはリスペクトされていることが非常に大事なことだろうと思います。学校が巣と申しますか、そういうような場所としての機能を持つということはすごく大事だと思いますし、あとは学校とそれを支える、自治会もそうですし、PTAもそうですし、地域全体で学校を支えているというような、膨らみがある方がいいと思います。学校というものだけだと、学校がどうも好きになれない、或いは学校が性に合わないという子たちも、やっぱりいる可能性はあるので、そうならないように私たちが努力しないといけないという思いはあるのですが、その外側にある、地域も含めたみんなで学校を支えている、そこに色々な考えや、うまくいかない時でも、先生や友達のもとより、地域のおじさんおばさんが受けとめてくれるような、リダンダンシーというか、そういう構造もあるといいと思います。

安全安心はもちろん、それぞれをちゃんと認めてくれるということは当然第一ですけど、その外側にコミュニケーションだったり、またその外側に地域とかそれを含めた膨らみのある巣のような存在になっていく、というこういうイメージが大事だと思います。

竹本委員

私も同じように、やはり子どもは地域全体で支えていかないといけないと感じていて、ビジョンの策定で私が注目したポイントが、子ども、市民の声を取り入れていただいて、ここでは教育に関するアンケートのみ紹介していただいていますけれども、子どもの教育だけではなくて、子どもが育っているまちの未来の姿とかを、保護者だけではなくて、子どもにも色々な意見を含めて、協議して、こういうふうに作成していただいているというのは、ビジョンを共有といったら大げさですけど、一保護者として一緒に作っているという感覚をととても持つことができました。なので、こういった大きな枠でのウェルビーイング、とても漠然とした話ではありますが、ひとりひとり形が違うからこそ、みんなで目指していきたいね、みんなで支えていきたいねというそういった印象、イメージをより多くの方と共有できるような、武内市長の発信力でもってお願いしたいと思います。

中島委員
地域で子どもを育てていくというのはとても大事な視点だと思いますし、教師だけでなく、自分の周りにいる大人全体、まち全体が活気づいていて発展している様子を子どもに見せるというのもとても大事だと思うんですが、この北九州市のまちづくりと教育との結びつきについて、市長のお考えをお聞きかせいただければと思います。
武内市長
まち全体の都市像を議論していく中で、北九州市の持っている大きな強み、あるいは目指すべき都市像として、非常に多様性に対して包容力がある。色々なタイプの色々な人がいて、色々な企業があって、それを包容していくという力、これはやはり五市合併の歴史もそうですし、北九州市の強みであろう。そういった中で、それぞれの多様性をリスペクトしながらも、何か上手いかななくてもそれをしっかりと受け止めて、何か挑戦している人の背中を押したり、ベタに言えば人情があって、しっかりとそれを大切にする。この繋がりこそが北九州市のアイデンティティーの中核のひとつだというような議論をしていて、その時にアットホームなまちをつくらうという、キーワードを検討している中です。北九州の強みというのは多様性を包容するということ。それからそれぞれが、個々が尖っていて、個性的であってもそれはそれでみんないいよねという形で応援をする。ここの考え方と、今おっしゃった教育は結構親和性がある、同期しているところがあると私は理解しています。そういった地域を作っていこうという話を都市像の中でしています。
中島委員
そのようにいい循環が生まれると、今の大人を見た子供がそのように育つ、そうすると、今の子どもが大人になったときに同じように次の世代に刺激を与えることができると考えると、まちづくり全体に活気が出てきて、私たちも子どもたちに明るい未来が渡せるかなと、夢が出てくるのでありがたいと思いました。
司会
終了まであと7分ほどとなりました。大綱のキーワードなどでも構いません。気になることがございましたらお願いいたします。
香月委員
大綱のキーワードの「先端的な学び」というのがイメージできないのですが、それについて教えていただきたいです。
栗原企画調整課長
ICT 教育であったり、或いはもうちょっと幅を広げると STEAM 教育であったり、そうした時代の流れに即応した、学びというのをイメージしてここに書いているところです。
香月委員
それをプランにどうやって落とし込んでいくのか、イメージできないのですが、さわりの部分でも教えていただけると。
栗原企画調整課長
プランに落とし込むのはこれからになりますけれども、現在すでに北九州市でも英語教育というのはリーディングスクール等を作って進めていますので、それを更に進めていく。或いは

ICT教育についても、一人一台端末等を使いながら、取組を進化させていく。或いは先ほど申し上げたSTEAM教育についても、例えば放課後という場を活用しながら、取り組みを進めていく、といったことが現時点でのイメージとして考えられると思います。
武内市長
おそらく、グローバルとかデジタルとかありましたけど、そういった意欲があったり、関心が強くある子たちもいる中で、そういった子たちに機会を作っていく。そういうことをどんどんやっていきたいと望む子には、どんどん機会を提供していくところも作っていかうというスタンスだろうという理解をしています。
田島教育長
ここであまり具体的なものをご説明するような場ではないと思いますが、例えば、今年度の事業の中で、スー1★グランプリという、中学生の子どもたちで、数学が好きなチームで競い合うイベントをやっていますが、このように、伸びたいと思っている子どもには、そういう環境を設定できたらというところで、先端的な学びを、次の2040年に向かってどういう具体的な事業化するかというのはまだ次のステップになると思いますが、伸びていきたい子にそのための環境を準備してあげられたらと考えています。
竹本委員
「誰一人取り残さない学び」にととても注目しています。これまでも、「誰一人取り残さない学び」の実現に向けて、北九州市は、一人一人に寄り添った取組を積極的に進めていただけてきたと思っており、とても感謝しています。やはり子どもたちの特性に応じた支援策の幅の広さが本市の誇りではないかと思っていますので、是非これからは、さらなる充実に力を入れていただきたいと思っています。
武内市長
不登校やいじめについては、今日の資料に文言は出てきていないが、中に入っているということでもいいでしょうか。
高橋教育次長
「誰一人取り残さない学び」の中に、不登校の問題、いじめの問題、特別支援教育に関わること、外国から来られた子どもたちのことなど、一人一人に合わせた適切な支援を行うような取り組みについて含んでいます。
郷田委員
大綱の案は、いろいろと考えていただいて作っていただいたものと思います。これを具体化するときに、先ほどあったように多様性あるメンバーで検討していくことが大事ではないかと思います。例えば、学校に行けなかった子どもだった大人とか、学校でなじめなかった大人とか、学校でうまくやってきて、それなりにいい大人になってしまったメンバーで検討するとおそらくまた枠にはまってしまうのではないかと思いますので、検討が具体化されるときに、是非色々な視点の色々なプレイヤーの方を入れて、ご検討いただければと思いました。
司会
それでは時間となりましたので、本日の議論はこれで終了となります。最後に市長から、一言お願いします。

武内市長

本日は皆様から貴重なご意見を賜ることができまして、大変有意義な会議となりました。深く感謝を申し上げたいと思います。

本日の会議を踏まえまして、次期教育大綱の検討を進め、来年2月に予定している次回の総合教育会議で、成案をお示しできればと考えています。

北九州市の未来を担う子どもたちのために、教育基本法の理念と新たな時代の要請を取り入れる考え方を基調とした教育大綱を作り上げていって、よりよい教育環境を整えていきたいと考えています。

今日議論している中で本当に多面的な議論をいただいた上で、また一つ一つの言葉というのがですね、丁寧に使わないと、私たちも、このワードがこういう意味だと、それぞれの経験と視点の中で、そこがずれないように、丁寧に言葉を使わないと、どういう解釈をするかというのを共有していかないと、誤解を招いたりすることもあるし、そのあたりをさらに磨きをかけながら、進めていただければと思います。

教育委員会の皆様には、今後もお尽力をお願いする事になろうかと思いますが、引き続き北九州市の未来のためにお力添えをお願いしたいと思います。

本日はありがとうございました。

司会

ありがとうございました。

これをもちまして、本日の会議を終了します。